様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０６３９５

研究課題名（和文）構築と再利用の観点による西洋建築史学の再構築のための基礎研究

研究課題名（英文）Basic Research for Reconstructing the Historical Study on Western Architecture in terms of Tectonics and Reuse

研究代表者
加藤　耕一（Kato, Koichi）

東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・教授

研究者番号：３０３４９８３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は西洋建築史研究を、様式という観点からではなく、継続する時間の観点から再構築する可能性を示した。従来の西洋建築史は、主として歴史上の建築が新築された瞬間に着目してきた。しかし本研究では、建築が建てられた後に遂げる変化に着目し、それを「再利用」（使い続ける）、「再開発」（破壊して新築する）、「文化財」（修復して保存する）という３つの態度に分類している。そのうえで、古代末期から始まる再利用、16世紀から始まる再開発、19世紀から始まる文化財、というように、それぞれの態度を歴史上に位置づけることで、新たな建築史研究の枠組みとその可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の主要な成果は『時がつくる建築：リノベーションの西洋建築史』（東京大学出版会、2017年）として出版した。本書は、建築史学領域、建築学領域、社会一般の領域のそれぞれに向けて、研究成果を発信することを試みたものであり、建築史学会賞、建築学会賞（論文）、サントリー学芸賞（芸術・文学）の3章を受賞した。本研究は、人口減少社会における建築のあり方を、建築史的観点から考える新たな視座を構築した。

研究成果の概要（英文）：This study shows the possibility of reconstructing the historical study on Western architecture, not from style, but from the view point of continuous time. Traditional study on architectural history mainly focuses on the moment when the buildings were first built. But this study focuses on the transformation after they were built, and classifies into three attitudes: "reuse"(continue using), "redevelopment"(scrap and build), and "heritage"(restore and conserve). In addition, the study shows the frame work and the possibility of the study on architectural history defining that the "reuse" began in the Late Antiquity, the "redevelopment" began in 16th century, and the "heritage" began in 19th century.

研究分野：西洋建築史

キーワード：西洋建築史　再利用　構築　文化財　リノベーション

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「近代」という成長時代から、脱・成長時代への歴史的転換点である現在、建築の世界では「既存ストックの活用」「空き家問題」など、20 世紀にはまったく考えられなかった問題が最重要課題となりつつある。このことは、歴史的に見ると、近代的な建築観を根本から改めなければならない時代に、われわれが直面しているということを示している。

19 世紀に誕生し 20 世紀を通じて発展してきた西洋建築史学は、成長時代（近代）を自己肯定する価値観を有していた。そして現在われわれが直面している課題に答えるためには、そのような西洋建築史学を根本から再構築する必要がある。こうした背景を踏まえ、本研究は、西洋建築史学の再構築のために「再利用」と「構築」という観点に着目した。

２．研究の目的

脱成長時代への歴史的転換期にあたる現在、既存建築の再利用という行為が重要な課題となっているが、「再利用」は西洋の建築の歴史のなかで繰り返されてきた本質的な建築行為であった。そうした観点から、「様式史」に基づく従来の西洋建築史学を解体し、「構築史（再利用史）」に基づく新たな西洋建築史学の基礎的な枠組の構築を目指す。並行して個別の事例研究も遂行し、それぞれのモニュメントが長い時間のなかでどのような変化を遂げながら現在まで使い続けられてきたのかという視点によって、従来のように竣工時点でカタログ化するのではなく、時間軸のなかで変化するモニュメント像を叙述する西洋建築史学を実践する。このような枠組的研究と個別研究の融合により、巨視的な視野と具体的な事象を組み合わせた総合的な研究を目指した。

３．研究の方法

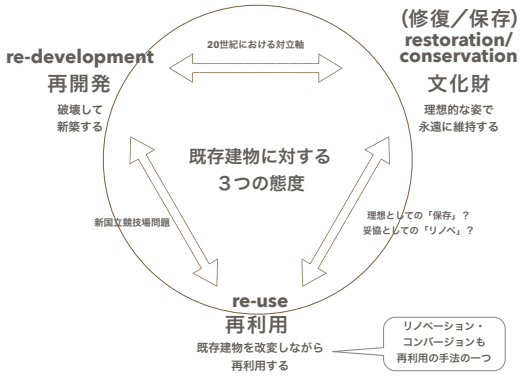
本研究は、①枠組的研究を中心的な研究課題とするが、これと並行して②事例研究を進めることで、抽象的な議論に終始するのでなく、具体的な事例を伴った総合的研究として遂行してきた。とくに西洋建築の「再利用」の歴史については、文献資料の調査、現地調査、さらには先行研究の批判的再検討により、これまで見落とされてきた建築再利用のさまざまな事例を収集した。そうした事例を整理することで、ヨーロッパにおける建築の再利用が、どのような社会背景のもとで具体的にどのようなかたちで行われてきたかを詳細に整理するとともに、「再利用」とは異なる態度である「再開発」、「文化財」がどのような時代背景、社会背景のもとで登場してきたかを整理することで、既存建築に対する価値観の歴史という観点から、通史的なまとめを行った。

４．研究成果

本研究の重要な前提は、建築に対する態度を時間の観点から次のように３つに分けたことである。

① 再開発（時間をリセットする）
② 修復／保存（時間を巻き戻す／時間を止める）
③ 再利用（時間を前に進める）

この三分法は、20 世紀の議論が「再開発 vs 保存」という二者択一の一辺倒だったことに対する応答である。「再開発（新築）」と「修復／保存（文化財）」に対して「再利用」というもうひとつの極を打ち立てたことによって、「建築デザイン」の歴史と「建築保存」の歴史、そして「建築再利用」の歴史を、一連の通史として論じることが可能になった。

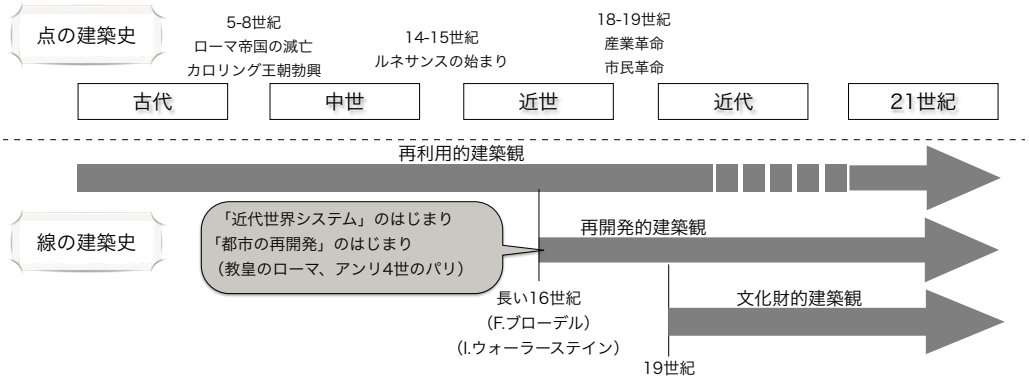


これまでの建築史は、基本的には新築の歴史であった。建築史研究は常に、歴史的な建築の創建当時の華やかな姿に思いを馳せてきた。したがって、建築の歴史を教科書的に記述していくと、どうしても竣工年によって整理していくことになりがちである。従来の建築史は、歴史上の建築を竣工年、建設年によって並べていく、いわば年代カタログであった。本研究では、そうした既存の建築史の方法論が〈点の建築史〉と命名された。

それに対して、建物の建設に要する長い期間や、建てられた後の時間変化に着目する本研究の方法論は、〈線の建築史〉と命名される。フェルナン・ブローデルが呼んだ「長期持続（longue durée）」のなかで、建物そのものがどのように変化していったのか（既存建物のアフターライフ）、そして「様式史」による時間区分よりもさらに長い時間のスパンのなかでもたらされる大きな社会変動のなかで、人々の建築観そのものがどのように変化してきたのか、という観点から、本研究の〈線の建築史〉は論じられている。

加えて、本研究におけるもうひとつの重要性は、上記の三分法に基づく「再利用的建築観」「再

開発的建築観」「文化財的建築観」という３つの建築観を、歴史的な枠組みのなかに位置づけたことである。すなわち既存建物に対する３つの態度という観点を考えたとき、これらの態度はただ単に現代社会に表出した複数の態度であったばかりでなく、それぞれ異なる歴史的な段階のなかで登場してきた態度だったという前提こそが、本研究の真価のひとつといえよう。



本研究のもっとも重要な成果は、巨視的な観点から演繹的に西洋建築史学の新たな方法論に挑戦したことである。その成果は、まさに西洋建築史の通史を根本から書き換えたといえる。

一方で、その方法論的かつ枠組み的な研究を支えているのが、個別的で具体的な歴史研究による帰納的ともいえるような、本研究の血肉を成している詳細な研究の数々である。本書のなかでは、これまでの西洋建築史学のなかで当然のことして受け入れられてきたいくつもの常識が覆された。大きな歴史的な枠組みを描きなおすことにより、きわめて重要な歴史的なディテールもまた書き換えられ得ることが明らかにされたといえるだろう。

個別研究としては例えば、以下のような研究成果が得られた。

<u>再利用の歴史に関する個別研究</u>
◆『テオドシウス法典』を史料に用いた、古代の神殿建築の再利用に関する研究
◆14 世紀の縮小時代における、ゴシック聖堂建設計画の中途での変更に関する研究
◆フランス革命期における、既存建物の転用に関する研究

<u>再開発の歴史に関する個別研究</u>
◆セルリオの『建築書』に見られる、再開発の価値観と再利用の建築実践に関する研究
◆パリの市壁の再利用と再開発に関する都市史的研究
◆非再利用という観点から見た、パラーディオにおける形式主義に関する研究
◆ペディメントの形式と語彙に関する研究

<u>文化財の歴史に関する個別研究</u>
◆パリのノートル＝ダム大聖堂と文化財的建築観のはじまりに関する研究
◆マドリッド宣言（1904 年）とモダニズムの関係性に関する研究

以上の研究成果をまとめると以下のような点が重要である。

①現代の建築学を歴史的な視野から議論する
21 世紀の現代社会では、既存建物のリノベーションのような、20 世紀にはほとんど議論されてこなかった新たな建築上の問題が最重要課題として浮上してきている。本研究はこうした現代的な建築関心を、歴史的な視野から議論することを可能にした。

②西洋建築史学そのものの再構築
専門化と細分化の進む西洋建築史学という学問分野において、従来の様式史とは異なる新たな枠組みを示し、それによってこの学問領域全体を刷新しうることを示したことは、新たな学問分野の開拓に等しい重要性を持つといえる。

③建築史学・都市史学・文化財学の融合の可能性
西洋の通史的な研究のなかに、都市史と文化財史を取り込んだことにより、これまで個別の領域のなかで議論されがちだった建築史、都市史、文化財学を分野横断的に研究することの基盤を構築した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　８件）
①総論:建築時間論――1000年の視野から建築を考える(建築と社会　1149(101) 10-13　2017年12月)
②現代日本のリノベーションへの希望 物質性のデザイン（座談会）(加藤耕一・常山未央・佐々木高之・海法 圭・佐藤研吾　SD2018　66-73　2018年12月)
③西洋建築に見るリノベーション　中世ローマの部材再利用（積算資料　前文 48-前文 52 2018年11月)
④時間のなかで転生する建築：ヨーロッパの歴史から学ぶ（月刊リフォーム　30-43　2018年10月)
⑤建築論壇　未来に向けた時間の継承（堀部安嗣・加藤耕一　新建築　42-47　2018年4月)
⑥建築時間論――近代の 500 年、マテリアルの 5 億年（加藤耕一・長谷川豪　10+1 website 2017年6月)
⑦パリのノートル＝ダム大聖堂(劇団四季ミュージカル　ノートルダムの鐘　40-43　2016年12月)
⑧加藤耕一氏に聞く　時間のなかの建築（TAKENAKA DESIGN WORKS　30 2-5　2015年7月)

〔学会発表〕（計　14件）
①ヨーロッパに学ぶ巨大建造物リノベーションの歴史（建築研究開発コンソーシアム　コンソ・プラザ（一般講演会）　2019年3月8日)
②時間がつくる建築の豊さとは？ ～ヨーロッパにおける建築再利用の歴史～（アカデミーヒルズ・スクール　東大教養シリーズ第６回　2019年2月22日)
③ヨーロッパの建築から学ぶ建築時間論（東洋大学理工学部建築学科 2018年度連続公開講演会「時間と建築」　2018年10月18日)
④建築の再利用と文化財について：ヨーロッパの事例から（金沢職人大学校　修復専攻科　講演 2018年10月5日)
⑤時がつくる建築（日仏文化講演シリーズ第320回　2018年9月18日)
⑥聖なるモノ　西洋建築史の観点から（地中海学会　大会記念シンポジウム　2018年6月10日)
⑦時間のなかで転生する建築：ヨーロッパの歴史に学ぶ（第23回Ｒ＆Ｒ「 建築再生展 2018」2018年6月1日)
⑧スクラップ＆ビルドの新築主義からの脱却―ヨーロッパにおける建築・インテリアの再利用（シンポジウム「Furniture for Future　使いながら守る・つなげる　新たな仕組みとしかけの提案に向けて」　2018年5月19日　九州大学総合研究博物館)
⑨自著を語る　『時がつくる建築』について（地中海学会　研究会　2018年2月17日)
⑩日本の近代化と西洋建築――時がつくる建築（全国近代化遺産活用連絡協議会　2017 年度桑名大会　2017年7月26日)
⑪世界遺産のなかの西洋建築　建築時間論の観点から（世界遺産研究会： 建築史・都市史・文化資源学から見た世界遺産　第２回　2016年9月21日)
⑫西洋建築再利用の歴史を探る（U-Talk　2016年8月6日)
⑬中世パリのまちづくり――建築再利用の歴史（小布施まちづくり大学　2015年10月30日)
⑭建築再利用の歴史と16世紀･19世紀の建築観の変化(中世建築研究会　2015年10月24日)

〔図書〕（計　７件）
①世界建築史15講（「世界建築史15講」編集委員会編 分担執筆　彰国社　2019年3月)
②L’idée d’architecture médiévale au Japon et en Europe（分担執筆 MARDAGA　2017年11月)
③芸術の都 ロンドン大図鑑 英国文化遺産と建築・インテリア・デザイン（フィリップ・デイヴィース著、デレク・ケンダル写真、加藤耕一監訳　西村書店　2017年6月)
④時がつくる建築　リノベーションの西洋建築史（東京大学出版会　2017年4月)
⑤近代建築理論全史（ハリー・フランシス・マルグレイヴ著、加藤耕一監訳　丸善出版　2016年10月)
⑥小さなリズム　人類学者による「隈研吾」論（ソフィー・ウダール著、加藤耕一監訳　鹿島出版会　2016年9月)
⑦Monumental　世界のすごい建築（サラ・タヴェルニエ、アレクサンドル・ヴェルイーユ著 加藤耕一・監修　ポプラ社　2016年7月)

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

加藤研究室のホームページ
http://www.history.arch.t.u-tokyo.ac.jp/kato/Welcome.html

６．研究組織

特になし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。